

その頃のこと

著者	福本 雅一
雑誌名	仏語仏文学
巻	8
ページ	7-8
発行年	1975-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017543

その頃のこと

福 本 雅 一

私が何となく関大仏文に入学したのは、昭和25年で、4分の1世紀昔になる。入学案内の、当時錚々たる某大教授であった T.I・T.K・R.I 等の諸講師の名につられて入ったわけだが、彼等はすでに去り、結果的にはサギにかかったことになる。尤も T.I だけは残ったが、1年に4回位しか来なかった。

当時の千里山は、歌に歌われたままの桃源境で、桃園と竹籟とが程よく混ざりあい、今の一高もまだ遊園地で、四季を通じて花は咲き、空は青く澄んで、学問をするには勿体ない環境であったため、ただ運動部のみが活躍していた。現在の堂々たる関大前の駅は、北の踏切り近くに、大学前という名で、切符売りの小屋と、貧弱なホームを横たえていた。千里山線も旧式の三輻連結が、角帽の懶チ者を満載して景気よく走っているほかは、沿線も開発されず、至極閑散なものであった。駅を降りると、赤煉瓦の正門まで、まばらに人家や店がある。右へ折れた経商の校舎は立派であったが、左へ登った法文のそれは、全くひどいもので、辛くも支えられた木造二階の廊下を、下駄履きの学生がガタガタ歩く、しかもどれも学問をするツラではない。仏文の教室は、不運にも小使室の上に位置し、床からはよく煙が洩れてきたものであった。

私は1回生の時は全く出席しなかった。同級生が何人で、どんな教師がいるやら、殆んど知らず、毎日、映画と野球を見、(当時の娯楽といえば、それにパチンコだけ) 碁を打っていた。私は登校しようとする友人に、今日も学校へ行くのか、と尋ねたことがある。

三木先生を初めて見たのは、期末の試験範囲を確認する最後の授業に於いてであった。その時の記憶は今も鮮かで、先生は黒いオーバを着ていた。

ストーヴがなかったからである。2年にはレ・ミゼラブル、3年にはアール・ポエティック、4年ではコント・クリュエルを習った。重本氏の1期、前原氏の2期に続くわれわれ3期の5・6名は、低能ぞろいで、授業では、2期の故大川氏あたりが、専ら張切っていた。2回生の頃から、何となくわいわい騒ぎながら酒を飲み、文学らしきことを論じ、時には乱闘に及んだ。先生は酒が好きで、そのため仏文の学生はみな、酒飲みだときめられていたのは残念である。

授業中、先生はよく怒鳴った。私は一度、他の先生はもっと紳士的だ、と抗弁したが、効果はなかったようだ。不幸にして、この短気は私に感染した。

卒業の年は最低の不景気で、職はなく、博士課程を終えてからも同様。そのような時に、よく先生にお世話になった。広い屋敷で、冬は寒い深井のお宅へもよく伺った。私は決してよい学生ではなく、4回生の時も、後期は完全にサボってしまったので、先生には結局、2年半しか教わらなかったことになる。しかし現在、^{アベキ}ABCと、よくないことも含めて、多くの知識をもっているのは、ひとえに先生のお蔭である。私はいつも感謝の気持ちをおぼれたことがない。

ともあれ私は、朝から特級酒を飲む身分になる、という先生との約束を、すでに10年前に果し、今は十分に満足して、恐らく代りばえしないであろう後輩たちを祝福しながら、暗澹たる学生時代を顧みることができるのである。

(昭29卒、詩人)